

緣起に就いて

宮 本 正 尊

1 佛教の根本的立場と緣起

緣起が佛教の根本的立場であるといふ表現は近代的である。これは原始的には緣起を成道觀とした阿含の一着想に溯り得る。しかし成道觀には幾通りもあり、最勝說法たる四諦觀の方がより原型的である。さらに緣起そのものの説き方に幾つかの型がある。それは理論研究の結果生れた術語であるからであらう。苦の現實諦觀が精細になり、それを理論的に根據づけをする役割を持つのである。四諦十六行相の苦諦下に苦・空・非常・非我があり、集諦下に因、*Heṭu* 集 *saṃudaya* 生、*prabhava* 緣 *pratyaya* が見出される如く、その因生、*hetu-prabhava* は、馬勝が舍利弗に説いた因生 *hetu-prabhava* に連なる。緣起の相關原理たる性格づけに成功したのは、龍樹が「緣起は空であり、それはまた假であり、中道である」と纏めてからで、空觀の深達に伴ふものである。しかし龍樹の決判にも拘らず、種子因生觀も胎生學的考察も併行はれた。一緣起説より十二緣起説に至るまで、古くから各種の緣起説が列擧されてゐたし、後世には賴耶緣起説から法界緣起六大緣起まで説かれた。緣起説でないもので緣起説として打出された反面、各宗の祖師で緣起に觸れずして宗義を説いてゐるものも多い。

2 他に類例のない佛教用語

緣起に就いて (宮 本)

佛教の特質を示す用語としては、三法印の無常・無我・涅槃を始め中道・緣起・波羅蜜等がある。この中で他に全く類例を見ないものを嚴密に限定すると、中道と緣起となる。苦・無常・無我は佛教以外にも類似的の用語があり、波羅蜜は後代的である。涅槃は佛教の基礎的原理であつて、古來三法印に數へられてゐるが、後世諸學派も採用し一般的用語となつた。佛が中道によつて現等覺したと言はれる如く、中道が佛の立場であることは、初轉法輪經等の原始佛教に照らし、大小乗を道觀して、動かない。佛教以前及び同時代の印度思想のうちに検討しても、また現代及び將來の世界思想を勘考しても、同様である。しからば緣起はどうか。

3 緣起は果して原初的術語か

paṭiccasamuppāda, *pratyasamutpāda* が緣起と譯されてゐる。現代の知識人が果してこれを一般思想用語として理解し探り上げるか、どうか。この點、中道や八正道は常識に富んだ健全な人生觀を規定したものとして、アリアン文化の一般用語のうちに熟したと見ても、素直に受け取れるし、中道は現代人でさへも廣く使つてゐる。これに對し、緣起は佛教者は分つた心算であるが、世俗は字義通りに由來と鮮し、何々寺緣起などと使つてゐる。「因緣生」よりも理解し苦く、原語そのものも直ぐ分かる言葉使ひでない。*Pratyasamutpāda* は現代英語になつてゐるが、*pratyasamutpāda* を現代語にするには、工夫が要る。緣起は理論づけをする思索的な特殊用語で、中道・八正道よりは一步深つた性格を持つてゐるからである。換言すれば、阿毘達磨的研究所産の「甚深」の言葉である。

4 自我主義のアリアン開拓文化と佛教の特質

アリアン文化用語は自我主義と開拓征服植民主義の領域にあり、

Aryan nationalism の框を持つ。佛教はその開拓主義を「正しい人倫的立場」に置きかへ、自我中心の殻を破り「他の存在價值」を認めんとする新しい社會理念を持つ。自と他を共に生かす爲に、忍辱精進の實踐に努める菩薩行を根幹とし、中道を實踐原理とする。

無常・無我は「自己否定」としては直接的表現であるが、ものの存在價值や他の人格存在を認める用語としては、間接的である。緣起は衆緣の存在價值を認める原理としては、端的な直接表現と爲し難いけれど、それをねらつた理づめの思想用語である。科學的であるとかへ言ひ得る。これら佛教用語の特徴は、自我的植民の Nationalism を超えた、協同社會的な平等觀 Universalism の基調にある。

この新時代の基調は、衆多因緣の平等性 samata 人倫の正しさ samma 對立を生かす中道 majjhima patipada にあつて、自我選民主義のナショナリズムの烟には育ち得ない。佛教は文化としてアラン自由開拓主義を承けて、中道によつてこれを收め、新しい社會理念としては無我・緣起を説き、宗教的には慈悲と涅槃の性格を持つ。「緣起」の性格決定もこの成立史的基盤のうちにある。

5 因起と緣起

緣起は「因起」に對して新時代的性格をもつ。因起と緣起は「因生と緣生」としてもよい。因生・因起は自我及び自性の思想に伴ふものであつて、人間が原始時代より今日まで持ち續けてゐる。「自」「因」「種」は自我・自己原因・種子として、これに對するものは「他」「緣」「類」である。自と因に對する他と緣とは、これを「一」に對する「衆多」と表出してもよい。衆多に意義を認めることは、擴大された環境、開かれた社會においてのみ可能である。大自然の恩恵と大宇宙の調和を感じ得る環境、相手と共に生き、對立を宥す

寛容精神が通る社會を豫想せずしては生れ得ない。緣起はかかる新時代の理念を解明する思想用語であるが、説明を聞いて始めて成程とうなづく語形を持つ。隨つて語義解釋も後世まで論争を續けた。āpaccaya にしても、「個」の具體性に重點がある。無我也緣起も「共相」に屬するが、無我の方はまだ分り易い。何れも自我文化に對するプロテストであり、反動的性格を持つ。しかし分り易い無我には反對する幾多の論難が鋒起したに拘らず、緣起にはそれほどでないのは、とりつき苦い甚深性があるからである。

6 因生と衆因緣和合生

馬勝が舍利弗に説いて轉向せしめたと傳へられる Ye dhamma hetupabhava tesam hetun Tathāgato āha/tesaṃ ca yo nirōdho evaṃ vādī mahāsamano 'ti// によつて hetupabhava は緣生・緣起・因緣生と譯され、緣起の偶とする學者さへあるが、明らかに「因生」である。paticcasamuppāda の用法は前件と後件において「緣つて起る」とされる。自因・親因と他緣・疎緣とを分け、前者を無視し、後者に限定して意味づけるならば、前者に問題が残る。阿毘達磨に六因・四緣・五果が追究され、唯識から華嚴へかけて緣起因門六義が考察されるわけがある。

7 相關原理としての緣起

前件後件、彼此相互の相關 anyonya-apekṣā, paraspara-apekṣā 一般原理を示すものとするには、空義による無我・無自性の深達に待たねばならない。しかし業報を正しく見分け、業務をありのままに見る緣起の古い使用法が Suttanipāta (III, 9, 60) にある。

- 1, 2, 3 宮本編『大乘佛教の成立史的研究』一一五六頁。四頁。
- 一頁。（文部省科學研究費、綜合研究の一部の要略）